

『石川啄木』

2016年04月15日

ドナルド・キーン氏が『石川啄木』を上梓している。キーン氏は、源氏物語に感動し、日本文学の研究者になった。戦時中、日本兵捕虜の通訳、尋問に立ち会い、彼らとの交流から日本への関心を深めた。日本文学の研究に没頭し、多くの本を出版している。そして、3・11の大震災を機に、日本国籍を取得し日本人になった。日本を愛している方である。

93歳になるキーン氏が、27歳で早逝した啄木の生涯を、彼が残した日記を中心に、克明に追い、精魂傾け、評伝を出した。しかも、英語で書いて、英語圏へ啄木を紹介したかったという。角地幸男氏が翻訳し、350頁もの大部の単行本である。

私は啄木に関しては、中学生時代、国語の時間に短歌を習ったくらいである。「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりぢっと手を見る」「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず」、このような短歌を思い出す。花鳥風月を優雅に詠った短歌ではなく、生身の生活をさらけ出して詠った歌人という印象であった。

今回、『石川啄木』を読み、天才的な歌人で、屈折した生涯を足早に生きた人であることを知った。森で木をつつく「啄木鳥（きつつき）」の音が好きであったそうで、それから「啄木」を号にしたという。啄木は若い時から文学的才能に恵まれ、新聞社などに勤務し、活躍の場を得ていた。しかし、破天荒な反逆児であったため、枠の中に納まらず、長続きせず、転々としている。北海道を漂泊し、その後、上京している。単身赴任し、芸者遊び、遊郭に通い、大酒のみで、借金に追われる生活をしている。家族で暮らした生活は短い。詩や短歌では生活ができないと、小説を目指したが、評価されず、短歌集『一握の砂』で歌人としてようやく名声を得る。

自分の文学的才能には自信があり、日記を書いて後世に読まれることを期待する面もあったようだ。他の文学者たちを言葉を尽くして、非難している。金田一京助、与謝野鉄幹・晶子夫妻など、当時の著名な文学者との深い交流を持っている。啄木は才能を買われ、多くの援助者を得るが、その恩義を全く忘れたかのように振る舞っている。結核で亡くなった母親の死後、1ヶ月後に、同じ結核で27歳の生涯を終えている。したい放題、わがままを貫いた生涯に見える。生活を確保できないのは当然だと言いたくなる。

啄木は「貧しい中に夭折した望郷の歌人」と評されたり、生活能力がなかったため「ダメ人間啄木」と言われたりした。キーン氏は啄木が書き残した「ローマ字日記」を読み解き、日記文学の分野で散文作家として高く評価している。古い共同体から追放された存在であったから、極端な個人主義的な生き方をした。キーン氏は「啄木が日記で我々に示したのは、極めて個性的でありながら奇跡的に我々自身でもある一人の人間の肖像である。啄木は『最初の現代日本人』と呼ばれるにふさわしい」と書いている。歌人の山田航氏は「早すぎた現代人」と評している。そして、キーン氏が西洋人であったからこそ見抜けた新しい啄木像であると言っている。

時代を画する仕事をする人は「狂」を持った人ではないか。常識では時代を突き破っていくことはできない。啄木が目の前にいると、とても付き合いきれない人ではないだろう。自己中心の塊である。しかし、彼は死をかけて文学を求め続けたのである。その苦悩の姿は十分に伝わり、人の心を打つ短歌を生み出していった。それが、キーン氏の関心を呼び、大部の本で、人々に紹介したかったのではないか。